

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：稲田健実 所属：福島県立平養護学校 記録日：平成28年2月24日

キーワード：「重度重複障害」、「社会生活」、「コミュニケーション」「評価」「観察」

【対象児の情報】

○学年 中学部第3学年

○障害名 肢体不自由（脳性まひ） 知的障がい

○障害と困難の内容

- ・伝えられる音声言語は限られた言葉のみである。
- ・「はい」と言えるが、それが質問に対する応えなのかは、はっきりしない。
- ・要求することはできるが、目的を伝えることが難しいので、要求の意味がはっきりしないことがある。
- ・要求の内容がはっきり伝わるようにという理由で、2年前から iPad の VOCA アプリである「DropTalk HD」を使っている。

定位反応	○ 聴覚刺激をじっと聞く。
探索反応	○ 後ろから興味がある音が鳴ると、体をひねって後ろの音の鳴る方向に向く。
快・不快	○ 笑顔・無表情。
要求・拒否	△ 不確かではあるが、要求では、両手を合わせての「お願い」のサインがあり、拒否では、手で払いのけることがある。
注意喚起	△ 「あー」等と言って、教師を振り向かせることがある。
有意語	－ 主語や目的語がない。

◎ 再現性有り、客観的な説明が可能 ○ 主観的には OK、実態の共有には課題 △ 芽生え、不安定 ー できない？ わからない

【活動目的】

- 当初のねらい 「VOCA アプリの活用が適切かどうか、確認することを中心にしながら、重度重複障がい児の表出や理解を捉えていく」
- 実施期間 2015年5月～
- 実施者 稲田健実
- 実施者と対象児の関係 学級担任

☆「小テスト」について

①上記にある「記録表」の項目に沿ってやりとりを行う。後で確認や評価をするためのビデオ録画も同時に行う。

- ・「すぐには対応しないテスト」・・・対象児からの発信があってもすぐには応じず、次にどんな表出をするかを待つ。表出方法として対象児が VOCA アプリを有効と感じているか、要求の度合いが強くなるか、などを確かめる。
- ・「間違っただけの提示テスト」・・・対象児からの要求のものと違うものを提示する。違うものをそのまま受け取ってしまうか、受け取らないかで、そのもの自体の理解や、ものとボタンの関係性の理解などを確かめる。また、受け取らない場合、次にどのような表出をするか、などを確かめる。
- ・「DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト」・・・使えるようになったボタンの配置を変える。ボタンの理解が場所や順番で理解してしまっていないか、などを確かめる。

②評価時は、普段かかわっている教師、主に学級の教師が項目毎にビデオを見ながら評価していく。その際、ただ単に項目ができたかできないかだけでなく、対象児の目線や動きなど、気付いたことを出し合うようにする。

③「小テスト」の実施時期は、要求の表出のときに「VOCA アプリを有効と感じているか？」というタイミングで実施し、約2週間毎に評価をするようにした。

④実施上の配慮点については、対象児本人からすれば「自分の意思がスムーズに伝わらない」ということを教師が意図的に作り出していくので、対象児が混乱しないようにしていくことが必要である。

○対象児の事後の変化

「小テスト」を行い、評価しながらかかわることで、対象児の意思の表出がスムーズかつ確実なものになってきつつあると思われる。例えば、

- ・指さしで伝えること。
- ・トイレの時には「でたー」、水を飲みたいときは「だー」など、いわゆる「言葉」ではないが音声で伝えること。
- ・「さようなら」と手を振って伝えること。
- ・VOCA アプリのボタンで伝えること。

このように対象児自身が使い分け、いろいろな手段で自ら伝えようとするようになってきた。さらに、担任以外の教師にも VOCA アプリなどを使って意思を表出することができるようになってきた。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づきとエビデンス

☆記録表をもとに「小テスト」を行いながら、対象児の表出や理解を押さえながら指導を進めることで、対象児が確実に使えると複数人で評価した VOCA アプリのボタンを7つまで増やすことができた。下記が「小テスト」の結果である。

(朝の検温 のやり取りの場面) 27年 9月 27日
・目的 (体温計) のボタンが適切に使えているかをテストする。

テスト項目	テスト時の子どもの様子	合否
すぐには対応しないテスト	・教師に気づいてもらえるまで何度も iPad 上の「体温計」 ボタンをタップする。	合
間違ったもの提示テスト	・間違ったものを受け取らず、体温計が来るまで「体温計」 ボタンをタップする。 ・体温計が来ると、「はい」と言う。	合
DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト	・初めは戸惑ったところもあったが、数回行くと、適切に「体温計」 ボタンをタップする。	合



◎適切なコミュニケーション場面が増えた。

* iPad 上の「体温計」 ボタンは使えている。

* 「体温計」ではないものを提示すると、もう一度 iPad 上の「体温計」 ボタンをタップし、「体温計」を提示すると「はい」と言うことから、「体温計」を理解していると思われる。

(トイレ のやり取りの場面)

27年 10月 21日

・目的 (トイレ) のボタンが適切に使えているかをテストする。

テスト項目	テスト時の子どもの様子	合否
すぐには対応しないテスト 	<ul style="list-style-type: none">・対象児が「でたー」「でたー」と言う。教師が気付くまで言う。教師が「何が？」や「どうしたの？」などと言葉かけをすると、対象児は「トイレ」ボタンをタップする。・「でたー」の音声による表出があり、iPad を介さずそのままトイレに行けば、それはそれで対象児は受け入れる。	合
間違ったもの提示テスト	<p><トイレとは違う場所に行こうとしたり、行ってみたいりするテスト></p> <ul style="list-style-type: none">・座位保持椅子に乗ったまま、教師主導で一緒にトイレの方ではない違う場所に行こうとすると、対象児はトイレの方に体勢を傾けたり、トイレの方を指さしたりする。・違う場所に行ってしまったときは、対象児は「でたー」「でたー」と言ったり、「トイレ」ボタンをタップしたりする。	合
DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト	<ul style="list-style-type: none">・初めは戸惑ったところもあったが、数回経験すると、適切に「トイレ」ボタンをタップする。・「トイレ」ボタンの場所がわからなくなると、「でたー」「でたー」と言ったり、iPad ごと教師に渡すようにしたりした。「ないよ」と伝えているようである。「トイレ」ボタンがあるページまで教師が誘導し、そのページが表示されると、「トイレ」ボタンをタップする。一度覚えると次からは適切に「トイレ」ボタンをタップできる。	合

◎適切なコミュニケーション場面が増えた。

* iPad 上の「トイレ」ボタンは使えている。

* 伝え初めの時は、対象児は音声で「でたー」「でたー」と言って、知らせたり伝えたりする。次に教師が言葉かけ（「何？」等）をすると、iPad 上の「トイレ」ボタンをタップする。

* 初めは自分の発信（音声による「でたー」）で伝え、相手がそれで分かればそれはそれでよくて、もし相手がわからなければ、iPad 上の「トイレ」ボタンをタップして、より確実に伝えるということになっていると思われる。音声の表出をしないで、初めから iPad を使って伝えることもある。

(水が飲みたい のやり取りの場面)

27年 10月 29日

・目的 (水筒) のボタンが適切に使えているかをテストする。

テスト項目	テスト時の子どもの様子	合否
すぐには対応しないテスト	<ul style="list-style-type: none">・対象児は「だー」と言う。教師に気づいてもらないと、「だー」「だー」と何度も言う。・「何を？」や「ごめん、聞いてなかった」などという言葉かけをすると、iPad 上の「水筒」ボタンをタップする。・「だー」という音声による表出があり、すぐに水筒を提示すると、iPad は操作しない。	合
間違ったもの提示テスト	<ul style="list-style-type: none">・違う水筒は受け取らず、自分の水筒が手元に来るまで「水筒」ボタンをタップする。・「水筒」ボタンをタップした後、友達の水筒と自分の水筒を一緒に提示すると、対象児は間違えることなく、自分の水筒の方に手を伸ばしてつかむ。	合
DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト	<ul style="list-style-type: none">・初めは戸惑ったところもあったが、数回行くと、適切に「水筒」ボタンをタップする。・「水筒」ボタンの場所が分からなくなると、対象児は「あー、あー」と言いながら iPad ごと教師に渡すようにして、「ないよ」と伝えているようであった。「水筒」ボタンがあるページを教師が誘導し、「水筒」ボタンがあるページを提示すると、「水筒」ボタンををタップできた。一度覚えると次からは適切に「水筒」ボタンをタップできた。	合



(左が自分の水筒、右が友達の水筒)

◎適切なコミュニケーション場面が増えた。

* iPad 上の「水筒」ボタンは使えている。

* 伝え初めの時は、音声で「だー」「だー」と言って、知らせたり伝えたりする。次に言葉かけ（「何？」等）をすると iPad 上の「水筒」ボタンをタップする。

* はじめは自分の発信（音声「だー」）で伝え、相手がそれでわかればそれはそれでよくて、もし相手がわからなければ、iPad 上の「水筒」ボタンをタップして、より確実に伝えるということになっていると思われる。

(給食 のやり取りの場面)

27年 10月 30日

・目的 (牛乳) のボタンが適切に使えているかをテストする。

テスト項目	テスト時の子どもの様子	合否
すぐには対応しないテスト	・対象児は牛乳のことを「だー」と言う。教師に気づいてもらないと、「だー」と何度も言う。 ・教師が「何を？」や「ごめん、聞いてなかった」などという言葉かけをすると、対象児は「牛乳」ボタンをタップする。	合
間違ったもの提示テスト	・間違ったものを提示すると受け取らず、「牛乳」ボタンをもう一度タップする。目的である牛乳が来るまで「牛乳」ボタンをタップする。 ・牛乳が来ると、「はい」と言い、飲む。	合
DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト	・初めは戸惑ったところもあったが、数回行くと、適切に「牛乳」ボタンをタップする。 ・「牛乳」ボタンの場所が分からなくなると、対象児は「あー、あー」と言いながら iPad ごと教師に渡すようにする。「ないよ」と伝えているようである。教師が「牛乳」ボタンのあるページまで誘導すると、対象児は「牛乳」ボタンをタップできた。	合



◎適切なコミュニケーション場面が増えた。

* iPad 上の「牛乳」ボタンは使えている。

* 伝え初めの時は、音声で「だー」「だー」と言って、知らせたり伝えたりする。次に教師が言葉かけ（「何？」等）をすると対象児は iPad 上の「牛乳」ボタンをタップする。

* 初めは自分の発信（音声による「だー」）で伝え、相手がそれで分かればそれはそれでよくて、もし相手がわからなければ、iPad 上の「牛乳」ボタンをタップして、より確実に伝えるということになっていると思われる。

(給食 のやり取りの場面)

27年 11月 6日

・目的 (牛乳と味噌汁) のボタンが適切に使えているかをテストする。

テスト項目	テスト時の子どもの様子	可否
すぐには対応しないテスト	・「だー」と言う。気づいてもらないと、「だー」と何度も言う。 ・「何を？」や「ごめん、聞いてなかった」などという言葉かけをすると、「牛乳」や「味噌汁」ボタンをタップする。	合
間違ったもの提示テスト	・間違ったものは受け取らず、牛乳なら「牛乳」ボタン、味噌汁なら「味噌汁」ボタンを目的のものが来るまでタップする。 ・「牛乳」ボタンをタップし、味噌汁を提示すると、「牛乳」ボタンをもう一度タップする。逆に、「味噌汁」ボタンをタップし、牛乳を提示すると、「味噌汁」ボタンをもう一度タップする。目的のものが来ると「はい」と言う。	合
DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト	・初めは戸惑ったところもあったが、数回行くと、適切に目標のボタンをタップする。 ・本当にボタンの場所が分からなくなると、「あー、あー」と言いながら iPad ごと教師に渡すようにして、「ないよ」とでも伝えているようである。目的のボタンがあるページまで誘導すると、目的のボタンをタップできた。	合



(←左が「ぎゅうにゅう」右が「みそしる」)

◎適切なコミュニケーション場面が増えた。

* iPad 上の「牛乳」ボタンと「味噌汁」ボタンは違いが分かって、使っている。

* 伝え初めのときは、音声で「だー」「だー」と言って、知らせたり伝えたりする。次に教師が言葉かけ（「何？」等）をすると iPad 上の「牛乳」ボタンや「味噌汁」ボタンをタップする。

* 初めは自分の発信（音声「だー」）で伝え、相手がそれでわかって目的のものが来ればそれはそれでよくて、もし相手がわからなかったり、目的のものと違ったものが来れば、iPad 上の「牛乳」ボタンや、「味噌汁」ボタンをタップし、より確実に伝えるということになっていると思われる。

* 目的のものが iPad 上にボタンとしての絵カードが無い場合は、その目的のものがある実際の場所を指さして伝えた。

(さようなら のやり取りの場面)

27年 12月 11日

・目的 (さようなら) のボタンが適切に使えているかをテストする。

テスト項目	テスト時の子どもの様子	合否
すぐには対応しないテスト	・「さようなら」と手を振ることができる。 ・帰りの会の終わりという、「さようなら」をタップするシチュエーションだけでは、「さようなら」をタップするのはまだ難しい。 ・『さようなら』の挨拶をしますよ」と教師が言葉かけをすると、「さようなら」とタップできた。	△ 合
間違ったもの提示テスト	<間違ったものではなく、場面を変えてみる> ・教室で『さようなら』の挨拶をしますよ」と言葉かけをすると、「さようなら」ボタンをタップするが、帰り際に廊下で対面してくる教師に「さようなら」と言葉かけされると、iPad 上のボタンをタップせず、「さようなら」という意味で手を振る。	否
DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト	・初めは戸惑ったところもあったが、数回行くと、適切に「さようなら」ボタンをタップする。 ・ボタンの絵カードが「さようなら」と似ている絵カードがあるので、戸惑った部分があった。 ・ボタンのある場所がわからなくなると、「あー、あー」と言いながら iPad ごと教師に渡すようにして、「ないよ」と伝えているようであった。	合



(←左が「さようなら」右が「こんにちは」)

◎適切なコミュニケーション場面が増えた。(iPadによる表出だけに限定しないと捉える)

* iPad 上の「さようなら」ボタンは教師の言葉かけがあると使える。

* 場面によって、使い分けている。iPad 上の「さようなら」ボタンをタップするときと、iPad は使わず、「手を振る」というジェスチャーをするときがある。

(本棚から取ってほしい音の出る本 のやり取りの場面) 27年 12月 11日

・目的 (「たいこの本」「ピアノの本」) のボタンが適切に使えているかをテストする。

テスト項目	テスト時の子どもの様子	合否
すぐには対応しないテスト	・「あー、あー」と教師の気を引くように声を出したり、本が置いてある本棚を指さしたりする。 ・「どうしたの？」などと教師が言葉かけをすると、iPad 上の「たいこの本」や「ピアノの本」など目的の本のボタンをタップすることができた。	合
間違ったもの提示テスト	・間違っている本は受け取らず、太鼓の本なら「太鼓の本」ボタン、ピアノの本なら「ピアノの本」ボタンをタップし、目的の本が来るまでその本のボタンをタップする。 ・「たいこの本」ボタンをタップし、ピアノの本を提示すると、「たいこの本」ボタンをもう一度タップする。「ピアノの本」ボタンをタップし、太鼓の本を提示すると、「ピアノの本」ボタンをもう一度タップする。目的の本が来ると「はい」と言い、受け取る。	合
DropTalk HD のボタン配置を変えてみるテスト	・初めは戸惑ったところもあったが、数回行くと、適切に目的の本のボタンをタップする。 ・本当にボタンの場所がわからなくなると、「あー、あー」と言いながら iPad ごと教師に渡すようにして、「ないよ」と伝えているようであった。	合



(←左が「たいこの本」右が「ピアノの本」)

◎適切なコミュニケーション場面が増えた。

* iPad 上の「たいこの本」ボタン「ピアノの本」ボタンは違いがわかって、使えている。

* iPad で伝わらない(教師に気付かれない)場合は、音声で「あー」「あー」と言って、知らせたり、伝えたりする。

* 言葉かけ(「何?」等)をすると iPad 上のボタンをタップする。

* 同じ「本」というカテゴリーでも、違いを理解し、適切にボタンを使うことができる。

○活動をふりかえって

- ・表出の様子やかかわりをビデオに撮って、学級の複数の教師で評価していった。その評価の中で、筆者が気付かなかった部分や、対象児のちょっとした仕草や目線の移動などを他の教師が気付き、それを活かして、次のかかわりへのステップとすることができた。
- ・共通の記録表を使って一緒に検証していくことで、教師が変わっても同じようなかかわりができ、対象児は混乱することなく、自分の意思を自由に表出できたのではないと思われる。
- ・「小テスト」を用いてのかかわりは、「VOCA アプリの操作が対象児の理解を伴っているか」を評価するための手立てであった。しかし、対象児が意思の表出を工夫したり、強くしたりするという効果もあったのではないかと考えている。
- ・「小テスト」の記録表は、魔法の宿題プロジェクトの重度重複障害研究グループ内で手続きや形式について検討を行って作成した。これを活用した結果を見た他の参加者からも「対象児のコミュニケーションの力がよくわかる」という感想を得たので、資料として有効であると考えている。

<考察>

「小テスト」を行いながら確認することで、適切なコミュニケーション場面が広がり、対象児からの発信がより確実さを増すことができたと思う。また、対象児はその確実さを基に、自分からの発信がより伝わっていると実感し、さらに伝えたいという気持ちが高まったのではないと思われる。さらに、かかわる教師で情報を共有することで、対象児は誰にでもよりよく伝わるという気持ちも高まったであろうと考える。

一方、意図的に「すぐには対応しない状況」を作ったときに、「だー」とか、「あー、あー」などと声を出し、教師を振り向かせてからボタンをタップするということができるようになってきている。また、iPad が手元に無いときにも、声を出し、教師を振り向かせてから指さしをするということも見られるようになってきた。そのことから、「察してもらいコミュニケーション」から、「自ら発信するコミュニケーション」へとレベルが上がってきたと思われる。「注意喚起」ということも増えていき、適切なコミュニケーション場面も、より広がっていくであろうと考えている。

【今後の見通し】

- ・「小テスト」について、「場面が変わったときは？」や「かかわる人が変わったときは？」など、より卒業後を見据えた指導に役立てる。
- ・「小テスト」を複数の人で気軽に実施できる雰囲気を作ったり、研修等の場を活用して「小テスト」の考え方を他の教員に知ってもらったりする。